様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　6 月　17 日現在

機関番号：40124
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：22520380
研究課題名（和文）　サンスクリット語古典のペルシア語訳文献史の基礎的研究

研究課題名（英文）　The preliminary study on the history of the Persian translations from Sanskrit classics

研究代表者
榊　和良（SAKAKI KAZUYO）
北海道武蔵女子短期大学・講師（非常勤）
研究者番号：00441973

研究成果の概要（和文）：この研究はサンスクリット語からペルシア語への翻訳文献史を構築し、その翻訳の担い手・対象・スタイル・質を探究し、その歴史的意義を明らかにするための基礎的研究である。既存のイスラーム系言語の刊本や写本の目録類の検討に加えて、インド亜大陸での写本資料調査・複写収集を行い、ペルシア語に翻訳された文献リストを作成した。この知見をもとに、近年研究代表者が発見したデーヴィー・ダースという一人のカーヤスタによって 17 世紀半ばに編まれた『真理の精髄』と題された翻訳・翻案撰文集を精査し、そこに含まれる『アムリタ・クンダ』の翻案である『生命の海』の解釈の仕方を分析した。その結果、翻訳者としてのカーヤスタ階級が翻訳史に新たな段階を生み出したことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This is the preliminary study of the history of the Persian translations from Sanskrit classics, and the textual studies on translators, readers, styles and quality in translation in order to evaluate the historical significance of the translation works. For this study, in addition to the bibliographic survey of the published manuscripts catalogues in Islamic languages, we carried out a field-survey in India and Pakistan to provide more comprehensive information about the existent manuscripts and made a tentative list of the translated works. On the basis of this survey data, we analyzed the recently found rare manuscript entitled *Sāra Tattva* (The Essence of Truth) or *Khulāṣah al-Khulāṣah* (The Essence of the Essences) compiled by Devī Dās, Kāyastha by caste. Analytical study of the quoted part of the *Baḥr al-Ḥayāt*（The Ocean of Life）which is a paraphrase of the *Amṛtakuṇḍa* made it clear that the Hindu translators brought new dimension in the history of the Persian translations from Sanskrit classics.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	300,000	90,000	390,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・印度哲学
キーワード：インド哲学、宗教学、思想史、ペルシア語、翻訳

１．研究開始当初の背景

サンスクリット語古典は、長い口承伝承の段階から文書の伝承領域へと継承され、注釈文献を数多く生み出しつつ関連文献を残してきた。サンスクリット古典文献学は、それらの伝承者が属する集団の時代や地域の政

治・社会的状況や思想的環境に基づく叙述意向をも含めて、これらの文献を批判的に研究してきた。従来のインド学・仏教学においては、西蔵訳・漢訳経典などの果たした役割を見ても明らかなように、文献学的研究の資料として翻訳文献は確固とした地位を占めてきた。

だが、アラビア・ペルシア語に翻訳されたサンスクリット語古典は、文献学的研究の資料として評価されてこなかった。ヒンドゥー教の聖典として広く認められる『バガヴァッドギーター』がヨーロッパ世界に紹介されたのは 18 世紀末のことであり、今日、広く用いられるサンスクリット語批判校訂本が依拠する最古の写本も 15 世紀半ばであることを考えるならば、インドにイスラーム政権が樹立される以前に叙事詩『マハーバーラタ』の一部がアラビア語でイスラーム世界に伝わっていたことや、11 世紀前半にはインドの地でアル・ビールーニーによる抄訳がなされ、その後、数多くのペルシア語訳が残されてきたことは注目に値する。

科学技術文献のイスラーム系言語への翻訳活動を皮切りに始まったインドとイスラーム世界の学術的交流に関しては、相互の科学技術史における創造的発展を生んだことに注目が集まる一方で、翻訳文献が叙事詩などを題材とする教訓的文学やヨーガの瞑想法などの精神的伝統の伝播をもたらし、後のインド近代諸語による文学に大きな影響を与えたことはあまり顧みられてこなかった。確かに実用主義の所産としての科学技術文献翻訳にインドの古典は貢献したが、その一方で、多くのインド古典文学がアラブ時代からの鑑文学（教訓文学）と同等の価値をもつものと評価されていたことも忘れてはならない。

14 世紀半ばから 17 世紀にかけてサンスクリット語で書かれたペルシア語教則本や語彙集兼辞書の助けで、翻訳文化は、外来のムスリム・エリートやその子孫たちにかわって、為政者の言語を学んだヒンドゥーのムンシー（秘書）やカーヤスタ（書記階級）らの手に委ねられることになった。彼らの手を通して、ペルシア語による翻訳・翻案だけでなく土着の民衆文学にも、イスラームの神学的象徴体系や倫理規範が伝わることになった。

このような影響力をもった人文社会学系の翻訳文献が、今まであまり顧みられてこなかった理由はいくつか考えられる。ペルシア・アラビア語を操るサンスクリット語古典研究者が少なくなったこと、基礎となる翻訳文献資料のほとんどがいまだに校訂出版されておらず、写本の形で各地に散在していること、とりわけインド亜大陸に分布する写本資料の利用が手続き的にも数量的にも制限をうけざるをえないこと、修復保存作業が行われているものを除いては当該写本の物理的状態が悪化の一途をたどるものも散逸しつつあるものも多いこと、これまでの研究の多くが刊行された目録にもとづいた翻訳・翻案文献の分類整理や紹介にとどまり、文献学的研究がほとんどなされてこなかったことなどが挙げられる。

近年、研究代表者は 17 世紀半ばに完成されたこうした翻訳・翻案の撰文集ともいえる写本を発見した。それを手掛かりとして、これまでに集めた文献情報とあわせて、この時代までにいかなるサンスクリット語古典がペルシア語に翻訳されたのかを検証することができると考えた。そして、翻訳史の転換期を考える上でもこの翻訳・翻案文献が重要な示唆を与えてくれるのではないかと注目した。従来の翻訳文化研究が対象とした翻訳者としてのムスリムの「異なる文化を見つめる目」ではなく、翻訳者としてのヒンドゥーが、「自らの文化を異なる言語で表現する」という翻訳のあり方に目をむけることで、彼らが翻訳史上に新たな時代を生み出していったことを立証できるのではないかと考えたのである。

２．研究の目的

この研究がサンスクリット語古典のペルシア語への翻訳文献史を構築し、その翻訳の担い手・対象・スタイル・質を探究し、その歴史的意義を明らかにするための基礎的研究であるために、基礎的資料として要となるサンスクリット語古典の翻訳・翻案文献のリストを作成することが第一の目的となる。

いかなるサンスクリット語古典がペルシア・アラビア語に翻訳されてきたのかについては、先行研究が科学技術文献に関して十分な成果を残している一方で、人文社会科学文献に関してはまだ十分とは言えない状況である。そこでこの分野を対象として、これまでに出版されている刊本や写本目録を精査して、ペルシア・アラビア語に翻訳・翻案された文献リストを作成する。さらに、各地に残された写本資料を広く調査し、不備や不足を補うことにする。

また、先に紹介した一人のカーヤスタによって編まれた翻訳・翻案撰文集『真理の精髄』の写本を校合し、そこに含まれる翻訳・翻案文献を特定し、この時代までにペルシア語訳されたサンスクリット語古典の翻訳・翻案文献リストを作成する。そのために、関連する翻訳・翻案資料の収集に努める。

一方、翻訳文献史に新たな段階を生み出したヒンドゥーの翻訳者たちの台頭の歴史的意義を明らかにするために、当該撰文集の編者であるカーヤスタの自伝的叙述を分析し、その社会的・宗教的立場を明らかにする。ま

た、当該撰文集に含まれるイスラーム世界に広く伝播した『アムリタクンダ』の翻案である『生命の海』を通して、ヒンドゥーの翻訳者の翻訳のあり方を分析する。

３．研究の方法

（１）翻訳・翻案文献リストの作成：サンスクリット語からイスラーム系言語への翻訳文献についてなされた先行研究をもとに研究史を整理し、そこに示された文献群、各地の図書館などに所蔵された写本目録、また研究代表者がこれまでに行ってきた写本調査ノートをもとにして、明らかになる限りの翻訳・翻案文献のリストを作成する。

（２）17 世紀末までにペルシア語に翻訳された文献群の検証：翻訳・翻案撰文集『真理の精髄』に含まれる翻訳・翻案文献をできる限り特定する。

（３）『アムリタクンダ』の翻案文献伝播の検証：『真理の精髄』に含まれる『生命の海』の部分を抽出する。『生命の海』の諸写本との比較により、『真理の精髄』が基づいたと考えられる伝承を吟味し、他のナータ派ヨーガ関連のペルシア語文献との関連を考察する。

（４）カーヤスタ研究：翻訳者であるカーヤスタという職能集団に関連する先行研究と関連文献を集め、研究史をまとめる。『真理の精髄』に示されるカーヤスタの神話的歴史に関する記述、自伝的記述、職能に要する学問や技芸に関する記述を分析する。

研究成果

（１）翻訳・翻案文献リストの作成に関しては、インド・パキスタンにおける写本資料調査やマイクロフィルム複写・デジタルファイルを収集することにより、これまでの目録データに修正を加え、暫定的な翻訳・翻案文献リストを作成した。特にナータ派ヨーガに関連する新たな写本データを加えることができた。たとえば、ナータ派ヨーガの主要論書である『ゴーラクシャシャタカ』のペルシア語訳が複数発見されたことで、そのサンスクリット語原典の成立と伝播をめぐる議論に新たな文献資料を加えることができ、欧米の研究者らにも高い評価を受けた。

（２）翻訳・翻案撰文集『真理の精髄』に関しては、現在入手可能な二つの写本を校合し、そこに含まれる翻訳・翻案文献をできる限り特定した。出典が明らかにされた翻訳文献としては、『マハーバーラタ』『ヴィシュヌ・プラーナ』『ギーターサーラ』『ラグ・ヨーガヴァーシシュタ』『アシュターヴァクラギーター』『コーカシャーストラ』などがあり、タイトルへの言及はないものの、『生命の海』『シヴァスヴァローダヤ』『ハリハラサンヴァーダ』『ブラフマーンダ・プラーナ』『シャーリホートラ』『二つの海の交わるところ』『ダーラー・シュコーとバーバー・ラールの対談』なども含まれ、幅広い学問分野のサンスクリット語古典のペルシア語訳、抄訳、翻案、インド・ムスリム知識人の著した綱要書、道徳論が「精髄」として引用されていることが明らかになった。

（３）『アムリタクンダ』の伝播をめぐっては、先に研究成果を発表したように、翻訳・翻案文献の複雑な経路が明らかになりつつあるが、その翻案文献の一つである『生命の海』が、『真理の精髄』の中に含まれていることがわかった。

引用箇所を検討した結果、それは、注釈をともなった『生命の海』の特定の写本に基づいていることが明らかになった。とりわけ、もとになったアラビア語訳の枠物語の一つに用いられたシハーブッディーン・スフラワルディーの『愛の論攷』の象徴的物語の解釈としてこの写本のマージンに加えられた注釈的説明と、『真理の精髄』における語句の説明が完全に符合することがわかった。

ナータ派ヨーガに関連する術語に関しても、ヴィシュヌ派のサンニヤースィンでもある編者デーヴィー・ダースが、ナータ派ヨーガに言及する他のペルシア語文献と同様の訳語を用いつつも、より詳しい神学的・修道論的解説を加えていることも確認された。また、『真理の精髄』には土着語でのドーハー（二行詩）が数多く含まれ、これらの分析を進めることで、この書がナータ派ヨーガ研究において、カビールなどの土着語資料と並ぶ価値をもつものとして評価されると考えられる。

（４）カーヤスタ研究に関しては、『真理の精髄』の編者であるカーヤスタが、サンスクリット語古典に示される神話的系譜などの伝承をよく理解し、自らのアイデンティティの拠り所としていることがわかる。加えて自伝的叙述からは、サンスクリットの伝統的学問を身につけイスラーム的な環境で育ったヴィシュヌを信奉するカーヤスタが、異なる宗教的伝統をもつ政権に宮仕えをする中で、自己について探究しようと思索を深め、アヨーディヤーのラーマ寺院に巡礼に出かけ、精神的導師らとの交流や書物を通しての勉学の結果、彼自身の勉強のためにまた内的世界を探ろうとする人々の啓蒙のために、彼自身がさまざまな古典のペルシア語訳を集め、それにインド古典の知識を加味して注釈を加えて編纂したことが読み取れた。

さらにこの書に示されるインドの古典的学問、技芸、そして実学の重視は、当時のペルシア語を操るヒンドゥーの知識人としてのカーヤスタが、自らの帰属するコミュニティのもつ神話的な伝承や系譜を重んじつつも、インドの古典的知の体系ばかりではなく、

ムスリム政権において地位を確立するために子弟のための教養・実学・行為規範からなる「書記のための鑑文学」をめざしてこの撰文集を編んだことを示唆する。

こうしたヒンドゥー・ダルマを身に着けたカーヤスタのアイデンティティの自覚と自負を促す教育や儀礼を重んじる伝統は、今回実施したアワドを中心としたカーヤスタ家族の実態調査からも明らかになった。今後、カーヤスタの間に伝わる道徳規範にかかわるマニュアルを収集するなど文献的な調査を進め、実生活での儀礼的・道徳的実践を照らしあわせることで、こうした伝統のルーツを明らかにすることができると考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連係研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 榊和良、「ヨーガの実践とペルシア語訳『ゴーラクシャシャタカ』」、『東洋文化研究所紀要』第 165 冊、2013 年 3 月、pp.129-157、査読有
② SAKAKI Kazuyo 、Kāyastha: Mediators between the Islamic and Sanskritic Traditions of Knowledge Systems、*South and Southeast Asia Culture and Religion (The SSEASR Journal)*、vol.7、 2012 年 3 月、pp.43-61、査読有
③ 榊　和良、「「内なるインド」とイスラーム、『南アジア研究』、第 22 号、2010 年 12 月、pp.277-284、査読無

〔学会発表〕（計 6 件）

① 榊　和良、Sufistic Perception of Yoga 、International Seminar on Sufistic Literature produced in Persian: Tradition and Dimensions、2013 年 3 月 10 日、(インド、アリーガル、アリーガル・ムスリム大学)
② 榊　和良、「サンスクリット古典のペルシア語訳とカーヤスタのアイデンティティ」、日本南アジア学会第 25 回全国大会、2012 年 10 月 7 日、（東京都府中市、東京外国語大学）
③ 榊　和良、「翻訳された理想の女性像―叙事詩『ラーマーヤナ』をめぐって」、日本宗教学会第 71 回学術大会、2012 年 9 月 8 日、（三重県伊勢市、皇學館大學）
④ 榊　和良、Kāyasthas : Translators of Sanskrit Classics into Persian、5th World Sanskrit Conference、2012 年 1 月 7 日、（インド、ニューデリー、Vigyān Bhavan）
⑤ 榊　和良、「スーフィー文学におけるシンボリズムとナータ・ヨーガ」、日本宗教学会第 70 回学術大会、2011 年 9 月 3 日、(兵庫県西宮市、 関西学院大学)
⑥ 榊　和良、「ペルシア語テキストを通して読むヨーガ」、日本南アジア学会第 23 回全国大会、2010 年 10 月 3 日、（東京都町田市、法政大学多摩キャンパス）

〔図書〕（計 1 件）
（分担執筆）

① SAKAKI Kazuyo, ‘Realization of Inner Divinity: Nātha Yogins in the Medieval Bhakti Movement’. Teiji Sakakta, Yoshitsugu Sawai, Katsuyuki Ida (eds.), *Historical Development of the Bhakti Movement in India: Theory and Practices*, Manohar: New Delhi, 2011, pp.131-156.

６．研究組織
(1)研究代表者
榊　和良（SAKAKI KAZUYO）
北海道武蔵女子短期大学・講師（非常勤）
研究者番号：441973

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし